

# ☆若者の睡りを窺ふ

Ree Ayaori  
李 綾織

## 黒い牝のスフィンクス

Que diras — tu ce soir pauvre âme solitaire.

(須藤光子に愛を込めて……)

☆水の書の始まり廣くて深い形姿を有し其處に在っては水が程んど動かずに滞って居る其れは巫女の海と呼ばれる、巫女の肉體の裡に這入った叡智は醗酵して今や沸々と泡立って数々の神託を即ち單語を放射し様として居る！若者の精神は肉體の裡に閉ぢ込められ生命の樹には死が徐々に攀ち昇って來るのだ、さあれ胎内の扉を開いて叢がる仔羊の群を神託を單語を合一し連ね旨の間が育てて來た羊仔屋から跳ね出させよふ、此の神託や單語そして羊の群は氣むづかしい遊牧の民だが金色の窠く裡に香煙を擧げる天地の開闢の歌となって出現しよふ、△騙し繪▽一匹の蛇の柄の爲に「巫女」は数々の奇蹟の此の堆積を Le Oie! a-t-11 forme 造り給ふた、『桐壺』天人花は死後に聖賢の魂の逍遙するエリゼの野邊に咲き亂れてゐる、嗚呼「戲言」と「幻ろし」の群達よ出發

だ新しい情と響とへ、光一碧穹と水簷を視開く鐘の音は日々かに天と地とを觀成る「帶木」  
 圓形劇場とは透明な陽差を雲滌り落す蒼空、石榴石の壁飾を躰に纏つた火とは黄泉へ飛馳  
 んで逝く太陽の光、「空蟬」神とは〇出田田を云ふ、其のホメロス以前の最高の傳説的詩人  
 で音楽家が歌い出すと天地が感激して不動の決定的な全能の「夕顔」神が創造した風景が崩  
 れて樹木も岩石も蠢動し始める！昏曙の光線の壁に圍まれた半ば裸はな寺院のやうな天  
 空、星雲の霸なき海面、東天に朝日の出る様子、「若菜」海の女神、空亮に響くテチスの  
 體に附いてゐる泡末の音、「末摘花」は験の變の月翳の希臘のアリステアス、アルタイ山  
 脈附近まで來る「Pleur au orel que le lecteur, enhardi et devenu ho-  
 mentairement féroce comme ce qu'il lit……」Alexander 大王、西トルキス  
 タンまで遠征、張藩西域に行く（西域と前漢との貿易）「光！」を食らふ眞珠の籠は「紅葉  
 賀」の月、箏 onar は神話から來た修辭、螺鈿色の薄紗は「花宴」月の光線、「葵」沙漠  
 とは無人の池、夕暮の豪奢、破棄された詩は金剛石、處女は木乃伊では無くて名殘惜し、  
 「榊」喪の小舟上、詩や音楽の靈感、鏡とは即ち水盤、透明な虚無とは即ち水、單純な黄  
 金、即ち髪の色、珊瑚の「花散里」姫は百年眠る！ロオマ帝國の軍團の徽章、激烈な  
 戦闘の行はれる夕暮、都市村落は兵燹に焼かれて夜は曉の如くに變はる、「永遠の漁夫」  
 とは「須磨」の太陽、音楽舞踊の律動から自己を解除してディアギレフの列から離れ去る！  
 愛情の森で神聖な舞踊に依って惹き起された喉の渴き、「鮮やかな火」とは肉に内蔵す

る所の火、<sup>パリアルツド</sup>「明石」<sup>あかし</sup>の云ふ「悲しい美」とは凡ゆる物を魅惑して然も自らは愛する術を識

ら無み美、<sup>ほか</sup>他者に與ふる事の出来ない美、<sup>ニンフ</sup>水精たちの戀に應えられ無み美<sup>アルヤチヤイナ</sup>【中國の絹、安息

を通じ歐洲に<sup>ヨーロッパ</sup>(SILK ROAD) 佛教の中國傳來! 班超の部將甘英大秦國に使す(途中断念)

印度や安息や亞刺比亞を介して盛んに絹が歐洲に入る<sup>ヨーロッパ</sup>。ありけりはじめよりわれはとおもひあ

がりたもおんおかためざましきしものにおとしめおたまたもふおなじほどそれよりけらうのころ、<sup>ポテ</sup>poter, son chemin abrupt et sauvage, a travers les herosages de

solés de ces pages sombres et pleines de poison; car... 大秦王安

敦<sup>ローマ</sup>(Rome) 皇帝 Marcus Aurelius Antoninus の使者、後漢に來る、絹貿易はアビ

シニアとベルシア人に独占される、法顯<sup>インド</sup>印度に至る(「佛國記」)「光!」を食らふ水の

青さは不波不死の蒼空の碧さでは無い、闇に閉されると黒く消え失せるから必滅で在り宿

命的でさえ在る、私の想像力は風が起れば浪立って消え闇が來れば暗黒の裡に消え挿く事

は東の間の情事で在り須臾で在る! 水に姿を映した「濡標」は微細に身己を點檢し自身を

眺める、「蓬生」鏡とは泉の銀色に光った水、「閨屋」が溜息を附くと水の表面が波動し

て「繪合」の水に映った駭も波動する、草笛とは「松風」蛇、ヴァルツァンは Mallard

が隠栖してゐた村! 少女のロマンとは夏の日、の擬人化、物質の一爆裂とは廣大無邊の

太陽を指す、マ「薄雲」とは少女、夏、詩糸理の疊韻法、半諧音、玲瓏たる太陽の運行、

瞑想の花一輪を水面に描く峡灣! 恐らく汲めども掬へど盡させぬ海を象徴してゐる Ver-

seaに寶瓶宮の黃道十二宮の記號は波形で在る、阿片吸飲者の告白とは貪婪な淫賣婦の戀愛

ヨン、アケイユス  
 逍遙学、犬儒性。Virtuose の孕んだ胸の乳房、ホフマン「金敷」と云う語に依って神秘的な魅惑を  
バツカス表現する「権」！一穂の火曜會の忠實な列席者で在ったが後に象徴派から離れた見者「少  
アルテチール女」、アルテチール曉の語る言葉の裡で「玉鬘」と呼び掛けてゐるのはセミラミス「初音」女王で在  
ケイロる【鳩摩羅什西域から來る（印度、西域の佛僧多く渡米）、北魏にゾロアスター教（妖教  
ノロアストラシム Zoroastrianism）傳わる、玄奘、義浄、印度に行く（『大唐西域求法高僧傳』）、玄  
ド宗即位、西域の風俗長安で流行する（『Horns of the Harp』 dans sa lecture  
レこころほそげにさとがちなを、よ、よあかずあねなるものにおもひなしてひとのせしりをもえはばからせたまはす  
メme l'orgue rigoureuse et une tension desprit égale au Horns à sa  
レためためなるうきおんもなになりかんだあつととなもあいなくもそはめつ、とまばゆきおんおん  
レdefiance, les emanations hortelies de ce livre indigent son ame  
おぼえなcomme l'eau le sucre……『唐・サラセンの戦、製紙法の西傳！唐代に西域との交  
レ渉盛ん、成吉思汗 Orizrin Haro 西征、是から東西交渉が榮える』を喰らふ天の星々、即  
ち「胡蝶」の意識！「蝥」に質問する、「常夏」の裸體の胸には鳥のやふに乳房が盛上る、  
肉慾を求めて悩んでゐる「篝火」の肉、星座が葡萄の房のやふに輝く、海、空、そして星  
の驚くべき美しさ、蛇に噛まれた傷口の裡に明哲な意識を眼醒めさせる猛毒、素朴なる土  
族、即ち蛇で在り官能の化身「野分」で在る！蛇に噛まれた「行幸」の肉體は謂はば魔  
墟の様なもので靈魂は其の魔墟の飾り物に過ぎない、思考する魚の地獄、我が豊沃なる  
沙漠、即ち「藤袴」の靈魂、偶像禮拜は思考を拋棄した物で在る、「真木柱」の「神  
聖の痛み」とは夢の裡で蛇に噛まれた痛み、肉體を具えてゐない空に依って塗られた

「梅枝」の翳、眼を閉ぢると云ふ試みは感 覺の世界の俘虜となる！「藤裏葉」の肉に降り注ぐ視線は内なる部分、内心に向けられてゐる、幽鬱な死を象徴する「若菜」の肉體の翳よ、大理石の「暗き目的」とは死で在る、遙かの天空にあつて汚れの無い「柏木」の叡智、單色となつてゐる冷たい天賦の葡萄の枝、翼ある狩猟の女と云う隠喩は皎々  
と照り冴ゆる月の意味で在る、蒼白に眼を天に向け 足を地に踏んで天に禱る、名稱の  
生の絆より解放せよ、諸腕をも溜息は押し上げて了ふ、胸は花籠のやうに乳房の蕾薇の  
花を盛つてゐる、「横笛」の暗い不分明な蔭の部分、覗ひ識り得ぬ心の奥底に堀り下げら  
れた鍾乳洞のつららの様に垂れ下つて一滴と殘酷なる寶石をほたりと泄すのである！  
大地より生れて大地に歸る誕生の契約、「唇の上」とは水平線の上、穏やかな味爽の境  
を闊歩する萬物を 死の裡に呑み下さむとする光彩陸離たる海、墓場に植ゑられてゐ  
る森林が長い枝をゆらくと風に搖つてゐる調子に乗つて「鈴虫」の死後の葬列が  
進んで行くさまを空想する、死に依つて宇宙に身を混淆させ萬象と合體するやうな  
茫莫として甘美な幻想！わが自殺、生の感覺、宇宙の深遠無窮、大洪水の裡に凍った魂の  
深刻微妙の火花、古代ギリシア人は歐洲の北東部、及び亞細亞の北部に住した白哲の膚の  
蠻人【教皇インノセント四世、ブラノ Carpi di 哈喇和林に派遣、佛王ルイ九世ルブル  
クを派遣、Marco Polo 元に来る】Il nest pas bon que tout le monde  
lisse les pages qui vont suivre quel ques-uns seuls s'avoureront ce

もおき、Graveなりゆくといはしたなきこととおかれど Pontifex Corthno Monte  
 fruit beer sans daber……》教皇ボニフエース八世、モンテコルビノを元に派遣、  
 ユロリアン 11. Khandaqakata イギリス Edward  
 歐州人多く海路泉州に来り、イル汗國の使者、英吉利王エドワード二世のもとへ行く、明  
 の鄭和、南海諸國に遠征、 Vasco da Gama 印度航路発見、光！を喰らふ風の響に満  
 ちてゐる木葉の繁り、眼覚めよふとして動き出す單語に「夕霧」が挨拶する、蒼空ロロロ  
 は晴れ渡った蒼空と其の空を吹き通して行く風とを同時に喚起する（Pp. 101-102）の羅旬語  
 法的使用）、「巨大な弓」と云う心象は樹幹のしなやかさから暗示され天空に投げ返すべ  
 き歌は矢に振へられる、本篇は昆蟲のぶん／＼唸る音のやふに、欲望が「御法」の内  
 部に滾って咳いてゐる様な詩で在る！金色の女微な警告とは蜜蜂に刺された軽い痛み、  
 「幻」とは poeires で在る、帯状をなした薔薇色の雲が徐々に夕闇の中に消えて逝く  
 光の塊が自然と空に融け込んで雲の塊も無くなって逝く、軽い金色の木の葉のさわめきの  
 波は凶わしと告げる前兆、「匂宮」の運命を占ふト兆と纏れて反響する、詩糸裡の微光を  
 停滯させ描させる事は、欺瞞ではあつても邪悪なる欺瞞ではなぬ、泉を取巻く森の樹木の枝  
 と枝との絡み合ふさまは盲人の掌を伸べて探るのに似てゐる！「紅梅」の靈魂の内部に没  
 入すれば其れは美しく深く広く無邊際であつて何物にも遭遇せず何物も捉へる事が出来な  
 ら、  
 「竹河」の接吻に依つて水には漣が立ち「橋姫」の映像は粉碎される、巫女が坐して  
 神憑りとなる三脚臺座には其の場所でアポロンに退治された大蛇ピトンを象徴して臺脚に  
 大蛇が絡み附いてゐる！「椎本」の予言者の靈感、神託の断片、詩の言語の破片よ巫女の

腦裏に集合せよ、純潔な少女だった『総角』の皮膚の上に聖痕の<sup>聖痕</sup>が現れたので

人々は彼女を巫女と認識し典禮の香を焚いて眠らせた、穢れの無い『早蕨』に取って泡立

つ資を受胎する機式が醜惡な物で在る事は解つてゐる、魔王サタンは天國を失墜した天使

で在る、『宿木』神を憎惡する前には神を狂狂しい迄に愛して居たので在る、『東屋』神は土の塵を

以て人を造り生の氣を其の鼻に吹入れたまへり、人即ち生靈と成りぬ、兇々しい樂器とは『浮舟』神

に依つて人間に認められた樂器、即ち自由意志！蛇の唾液は蜘蛛の絲のやふな絲を紡ぎ出して其の布

地を『蟬蛉』に著せるのだが蛇の言葉で織る布は更に強靱で彼女を絡んで了ふ、智慧の樹は其の根を

岩の割目に潜り込ませて地下の水を吸ひ上げて樹液となし樹液は幹を昇つて梢の葉の茂みに

達し永遠の朝明の碧玉の中に消えて逝く！墓地の急斜面からは紺碧の海が眼前に對立す

る如くに観え其の地方独特の漁船の帆が屋根の上に鳩が群れてゐるやふに漁つてゐる、

【僕は憂鬱を勇氣に疑惑を確信に絶望を希望に<sup>かたじけなきみこころは、のたくひなきをた</sup>へ

のみにてまじらひたもころやさしければあみだばとけにおもひまぢらはし、いとものもい、

avant de pénétrer plus loin dans de pareilles landes inexploitées,

tarir de Grogg ou de Grogg, mais nous n'y sommes pas, nous sommes Grogg et nous

dirige tes valons en arrière et non en avant; Les chants de Ma-

Idolor; ISIDORE DUCASSE ……」其して惡意を善に懷疑を信頼に、屁理屈を沈着冷

静に、傲慢を謙抑に置き換えるを喰らふ「至日の炬火」は「午」の極」に對応する！

【手習』鳩は聖靈を指し魂の不滅不死の象徴、死は一つの長い怠惰で在る、『夢浮橋』

艇の櫂は整然と間隔を置いて水を叩き掻いて水中に映つた空を弔鐘の響が「空を撃つ」

やふに破壊する、果實の重みが樹の地面への束縛を益々強固にし葉も果實も備へた完全な  
 樹木として椰子の實を天と地との間の中道に揺り動かして時間を計測してゐる！神託の主  
 は即ち棕櫚の樹、闇黒と苦惱から最後の解放を齎らす涙の河の流れに巫女は狂喜する、互  
 いに合一する新しい單語の結合、感覺と叡智との肉體と精神との生と死の意識との過去と  
 未來との合一が將に完成されようとする、巫女は此の詩篇に於ひて譫妄を口走り喘ぎ歎息し  
 てゐる、然し此の「光源氏」乃「葬春賦」とも呼ぶべき錯亂は迷妄ではない、苦惱の  
 果てに神託が言霊が舞ってへ何かしら偉大な遊戯の破片を騒めく詩が誕れ出たのだ、巫女  
 の不純な肉體から新しくして眞白な聲が生れたのだ、教主たる百頭の女は耳を傾けて此の鳥  
 籠を抜ったマヌカンの未來への禱りを聴いて居る！穏やかな波の裸な言霊に溺れた顯  
 を鞭打つソドムの壊滅、皇帝 Augetus と Tydie の巫女は隠微に燦々と仄めいて  
 観る夜の間に点々と漂ふ小さな燐光を古ぼけた神學書や魔法書や或ひは哲學史や思想  
 史や美術史などのドロドロの隙間から丹念に拾ふて集める事を好む奇妙な性癖の持主な  
 ので在る、煩瑣すぎると想われるならば、若者の睡りを鷄や牝のドロドロに寛恕せられよ、  
 初發に「言」が神と共に在り凡ての物象は是に依って出來た、此の「言」に命が在り命  
 は人の光で在った、「言」は肉體と成り若者の裡に宿った、光は闇の裡に輝いて居る、  
 光！光！☆

フエツリエ ヴァンテ・アン リツエール  
 Février 21th - 1976 L'hiver